

## 世界価値観調査

山崎聖子

世界価値観調査 日本代表

世界価値観調査 (World Values Survey) は、さまざまな国や地域の人びとの意識変化と、そうした人びとの意識が社会的、文化的、および政治的变化に及ぼす影響を中長期に、そして世界規模で捕捉することを主眼とした国際協働プロジェクトである。

統一の調査票を用い、各国や地域を代表する 18 歳以上の男女個人を対象にした面接法により、最低 1,000 サンプルの回収を目標とすることを基本にしている。ただし、実査にあたっては実施国や地域の社会・経済・政治情勢に即した微修正も加えられる。設問は 250 項目以上で、政治・経済・労働・宗教・家族・社会・国際問題など多岐にわたる。調査は 1981 年以降、European Values Study (以下、EVS) とのコラボレーションにより、約 5 年間隔で実施し、2015 年、第六回<sup>1)</sup> 調査が終了し、現在第七回調査に向けて準備中である。

調査の参加国は当初わずか 10 か国だったが、ミシガン大学のロナルド・イングルハート教授が中心となって世界各国の研究機関に呼び掛け、調査対象国や地域は回を重ねるごとに増加している。第六回までの、のべ対象国・地域は 90 を超える。宗教的背景・政治体制・経済水準が異なるさまざまな国や地域が含まれており、特に、これまで社会調査のデータが入手困難であったアフリカ・旧ソ連諸国・

中南米・中東の国や地域のデータは、研究者にとって貴重なものとなっている。

世界価値観調査は、各国・地域から参加する 1 研究グループの国際的な協力からなる。自国・地域にお

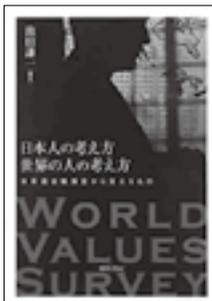


写真 第六回世界価値観調査で得られた、日本を含む 57 か国のデータを分析した 10 人による共著『日本人の考え方 世界の人の考え方』(勁草書房、2016 年)



図 世界価値観調査がカバーする調査エリア

ける調査の実施・集計、そして広報なども含む窓口的な役割を担当する研究グループおよび代表者は Principal Investigator (PI, 主査) と呼ばれる。各国・地域の調査結果を相互に提供し合うことにより、PI は参加国・地域のすべての調査結果の入手が可能となる。調査データや研究成果は、調査終了後一定期間を経て、インターネット上でも公開している<sup>2)</sup>。

各国・地域の PI は対等な関係にあり、プロジェクトの円滑な運営のために、World Values Survey Association (以下、WVSA) が事務局の任にあたる。WVSA はイギリスに本部を置く非営利団体で、イングルハート教授が初代会長を務め、現在は二代目会長をクリスチャン・ヘイファー教授が務めている。重要事項については、10 人前後で構成される実行委員会によって素案が作成され、参加国・地域の同意をもって決定される。調査方法・項目等に関しては日本を含む 10 人で構成される Scientific Advisory Committee を中心に議論している。

調査データは、学界での研究利用だけでなく、政策立案にも役立てられており、マスコミや書籍等のメディアを通じて広く一般にも有益な知見を提供している。EVS のほかにもラテン諸国を拠点とした Latinobarómetro やアフリカ諸国を拠点とした Afrobarometer などとも協力体制を構築しており、今後も様々な研究グループとの知見の交流や協力により、研究の深化、発信の強化を目指していく。

## 注

- 1) 調査実施年は国・地域により何年かずれるため、一つの調査回を「wave (波)」と称するが、ここでは「回」と記す。
- 2) <http://www.worldvaluessurvey.org>



## Column

世界の  
調査日本の  
調査

# East Asian Social Survey (東アジア社会調査)

岩井紀子

大阪商業大学総合経営学部 教授, JGSS研究センター センター長

EASSは、東アジアでGeneral Social Survey (総合的社会調査)を実施している日本・韓国・台湾・中国の研究チームが連携して、共通するモジュールを作成し、それぞれの全国調査に組み込んでデータを収集した上で、統合データを作成するプロジェクトである。JGSSが2003年に開催した国際シンポジウムからスタートした。表に示すように2年毎にテーマを決め、約60間のモジュールを英語で作成し、各社会の言語に翻訳して調査に組み込む。

2008にはボーガダスのsocial distance scale, 2010にはSF-12 Health Survey, 2012にはposition generatorを組み込んだ。2016では2006で実施した「家族」の10年後を、2018では「文化とグローバリゼーション」の10年後をとらえる。モジュールとは別に、「基本属性の変数」を毎回組み込んでいる。

4チームは毎年、春と秋に研究発表会・運営会議・モジュール作成会議を開催している。ホストチームはローテーションで、他の3チームから2名ずつを招聘する。プリテストの結果を踏まえ、各社会の状況や調査事情について議論を尽くして、モジュールを練り上げる。英語の質問文や選択肢を、どのようなニュアンスの言葉に訳すかを確認するために、しばしば「漢字」が活躍する。韓国では、若い研究者は漢字を学んでおらず、EASSの今後が心配である。

4チームの統合データは、成均館大学 Survey Research Centerの管理するEASS Data Archiveにオンラインで登録すれば利用できる。ICPSRにも

寄託している。2006, 2008, 2010は、JGSSがデータを統合し、コードブックを編集した。JGSSはさらに、各設問についての日韓台での分布を図表で比較・解説した図書を刊行している。

EASSの特徴は、①東アジア社会に特有な問題に焦点をあて、②抽出と実査の管理が厳密でデータの質が高く、③継続調査に組み込むので調査実施の費用が抑えられ長期的な視点から運営でき、④GSS型であるためモジュール以外にも比較できる変数が多数含まれ、⑤4チームが対等な立場で協議・運営し、⑥モジュールごとに専門研究者が入れ替わり、学際的多様性に対応しており(2010では疫学・公衆衛生の専門家が参加)、⑦共同で分析を行い、国際学会でセッションを組み、プレゼンスを高め、各チームが継続的に研究費を確保できるような協力していることである。

一方、EASSも国際比較調査が直面するあらゆる困難から自由なわけではない。①意識設問における選択肢の設定の仕方や、②質問文と選択肢の翻訳問題に対処し、また③JGSS以外の3チームが参加しているISSPのテーマや設問との調整を図っている。最大の問題は、調査費の確保である。KGSSは2014を実施することができず、JGSSは2016の本調査の費用が確保できていない。EASS 2014以降、4チームの調査のタイミングを合わせるようになっていく。

調査名	日本版総合的社会調査 (JGSS)	KGSS: Korean General Social Survey	台湾社会変遷調査 (TSCS)	中国総合社会調査 (CGSS)
調査主体	大阪商大 JGSS 研究センター	成均館大 SRC	中央研究院社会学研究所	人民大中国調査与数据中心
EASS 研究代表	岩井紀子	金知範	傅仰止	王衛東
EASS 事務局担当	2008-09	2004-05 / 12-13	2006-07 / 14-15	2010-11
担当モジュール	EASS 2010	EASS 2006 / 2016	EASS 2008 / 2014	EASS 2012
テーマ	Health	Family / Family	Culture & Globalization / WorkLife	Social Network Capital
調査対象	20~89歳の男女	18歳以上の男女	18歳以上の男女	18歳以上の男女
抽出方法	層化2段無作為抽出	層化3段無作為抽出	層化3段無作為抽出	層化4段無作為抽出*
調査方法	面接・留置法の併用	面接法	面接法	面接法
調査頻度など	2000年以降1~3年間隔; EASSは主に留置調査票に組み込み	2003年以降15年を除く毎年 (EASS 2014は実施なし)	1984年以降毎年; 90年以降は毎年2種の調査を実施	2003-13年まで毎年; 以降は隔年
EASS以外に組み込んでいる調査	なし (ISSPはNHK放送文化研究所が実施)	ISSP (2003以降)	ISSP (2002以降)は別調査に組み込み; 2010は同一の調査に	ISSP (2009以降)は別調査に組み込み

\* 2010年以降は、層化3段無作為抽出。JGSS: <http://jgss.daishodai.ac.jp/>, KGSS: <http://kgss.skku.edu/>, TSCS: <http://www.ios.sinica.edu.tw/sc/>, CGSS: <http://www.chinagss.org/>, EASSDA: <http://www.eassda.org/>